

『氷の王子と魔法使いは花の褥で恋を語らう』

著：水樹ミア

ill：羽純ハナ

城砦は山の中腹にあった。全体が石造りで、背後の斜面以外、ぐるりと高い城壁に囲まれている。堅牢な城門はラファの背丈の五倍はありそうな大きさだ。圧倒されたラファだが、城壁の下を雪が埋め始めているのを見て、必然として城壁や城門が高くなったのだろうと悟った。高くないと積雪に越えられてしまうのだろう。

隙間なく並べた木の杭と金属を組み合わせた吊り門扉は古く、錆びたり色褪せたりしている部分もあったが、現役のようだ。

ラファのちょうど目の前には金属製の輪がかかっていた。叩いて来客を知らせろということか。

「ああ、先に目くらましの魔法をかけておかないと」

麓の村でかけた目くらましの魔法はとっくに切れている。ラファは自分の身体に向けて光の精霊への合図を送る。

準備を済ませ、ラファは緊張しながら扉の輪を手にする。こんな小さなもので、城の中に聞こえるのだろうか。半信半疑ながらもラファは輪で城門を叩く。

叩いてラファは納得した。ゴンゴンという鈍い音とともに辺りに魔法の気配が広まっていったのを感じたからだ。

これは魔法具かと、ラファはまじまじと輪を見詰める。見たところ、ラファの知るような魔法陣は刻まれていないし、精霊が力を貸してくれた雰囲気もなかったが。

「もしかして、古代の魔法具？」

ラファが思い付いた直後に、城門の吊り門扉が地響きのような轟音を立てて上がり始めた。

ラファは驚いた。見ず知らずの人間の訪問に正体を質しもせず迎え入れるなんて。

だが、すぐに勘違いだったと気付く。

開いた門扉の向こうから、馬の脚が見えたのだ。それも一頭や二頭ではなく、しかもいずれもこちらを向いている。

「今、呼び出しの魔法が鳴らなかったか？」

「城門が開く弾みで鳴ってしまったんでしょう」

ゆっくり上がる門扉の向こうからそんな会話が聞こえてくる。ラファの訪いに反応してくれたのではなく、出かけるところだったのか。

ラファはとっさに城門脇の石壁の陰に隠れた。

門扉が上がりきると、五頭の騎馬と三台の荷馬車が次々と外に出てきた。全てが出終わったところで、先頭にいた軍服らしきものを身に纏った中年の男が辺りを見回し、馬の首を取って返

す。ラファはぎくりとしたが、見付かったわけではないらしい。

「今年の冬はいつもより早いようすな。間に合ってようございました」

中年の男は城壁の上に話しかけているようだ。ラファは首を伸ばしてそちらを見た。いつの間にか城壁の上の見張り台に誰かがいるようだ。逆光のせいで姿は見えない。

「それではウィルク殿下。お元気でいらしてよかった。弟君にもご息災でいらしたとお伝えいたします。ウィルク殿下のこと、本当に心を痛めておられますからな。また雪が融ける頃に参ります。それまでどうぞお健やかに過ごして下さい」

中年の男の言葉を聞き届けた城壁の人影が無言で去る。

「ああ。恐ろしい。キシゼ様、早く帰りましょう。一刻だってこんなところにいたくない。あんな呪われた王子殿下から離れましょう」

人影がすっかり消えると、中年の男の傍にいた従者らしき男が零す。

「滅多なことを言うな。殿下は我ら臣民のためにこの城に一人で籠もっておられるのだ。初雪の後は決して誰もこの城には入れず、たったお一人で」

中年の男は従者を諫める。人影の消えた城壁の見張り台に一礼をしてから、城門に背を向けて馬を進ませる。

「あっ」

城門の吊り門扉が音を立てて下り始めた。ラファは逡巡したが、門扉が下りきる前に門の中に身を滑らせた。

先ほどの男は、初雪の後は決して誰もこの城には入れないと言っていた。では今を逃しては城の中には入れない。

ラファの背後で城門が完全に閉まる。

「ラファ。今の人達、呪われた王子殿下って言ってたよ？」

胸元でリリが不安そうに零す。

「うん。もしかして怪物って、その王子殿下のことじゃないかな。きっとさっき上にいた人のことだと思う」

中年の男が国から派遣されてくるという偉い人なのだろう。怪物の様子を見に来るのではなく、何らかの事情を持った王子様がこの城砦に滞在していて、その様子を定期的に見に来ている、というところだろうか。

「王子様なら人間じゃないか。怖いことはないよ」

ラファは辺りを見回す。城門を入れてすぐは広場になっていた。広場の両側は庭のようだが、植物が育っている様子はなく寒々しい。広場の先に石壁に囲まれた階段があり、そこが城砦の居館に続いているらしい。階段の下までやってきて、ラファは思案した。城門は勝手に潜ってしまったが、さすがに居館の中にまで勝手に入るのは躊躇われた。

ラファは階段を上ってみたが、城門にあったような呼び出しの魔法具は階段上の扉には見当たらない。手で扉を叩き、声を張り上げて住人を呼んでみたが、立派な居館の隅々にまでは届かないのか、何の応答もない。

階段を下りて居館の周りをぐるりと歩いてみたが、人の姿は見かけない。

「リリ。さっきの人がどこにいるか上から探せるか？」

困り果てて、ラファは懐の中のリリに問いかけた。

「無理。寒いもん」

リリは縮こまっている。

「これなら？」

ラファはほんのちょっと出ているリリの白い額に指先で触れる。「春の気を纏わせよ」と指先で魔法の文字を描くと、リリがぱっとラファの胸から飛び出した。

「寒くない！」

「それで少しの間は大丈夫。頼まれてくれるかな？ 住人を探して、客が来ていると伝えて欲しい」

「しょうがないな。ラファは僕がいないと駄目だから」

「まったくその通り。リリだけが頼りだ」

ラファが頷くと、リリはピイッと嬉しげに鳴いて、羽ばたいた。

ラファの頭上で一度旋回して、城の窓から中を探るように飛び始める。

「えっ」

ラファがその様子を見守っていると、突然、城の窓から黒い影が踊り出してきた。影は屋根を蹴り、正確にリリに向かって跳び上がる。

「リリ！」

ラファの叫び声に気付いたのか、リリは寸でのところで影を避けた。そのまま勢いよくラファに向かって滑空してくる。

「ラファ、助けて！」

リリはラファの肩に爪を引っかけて止まる。そのままラファの背後に回り込んでからラファの髪の中に潜って隠れた。リリを追いかけてきた影が屋根の上や壁を矢のように疾駆してきて、ラファの目の前で止まる。

「狼！」

ラファは息を呑んだ。影の正体は狼だったのだ。森で見るものよりずっと大きくて、灰銀の被毛を持っている。首筋の毛を逆立て、牙を剥いてこちらを威嚇している。

ラファはじりじりと後ろに下がった。

「す、すまない。勝手に入ったりして」

狼からはただならぬ気配を感じる。おそらくこの狼はリリと同じような存在だとラファは直感する。それならば人語が通じる可能性は高い。

「俺はラファという。どうか、この城の主に通りを願えないだろうか」

ラファは人に対するのと同じように狼に告げた。

「お前は魔法使いか？」

声が聞こえてきた。一瞬、目の前の狼かと思ったが、違った。居館に続く階段を人影が下りてきたのだ。

ラファは目を瞠った。

現れたのは、ぞっとするほど眉目の整った若い男だった。年の頃は、二十代の半ばか。切れ長の目は冴え冴えとしている。鼻梁は高く、唇は薄く形よい。髪は黒檀のように艶やかで、このような寒々しい城の中で、貴公子然とした衣服に身を包んでいる。

だが、何より特徴的なのは、彼が魔力を纏っていたことだ。

きっと彼が呪われた王子殿下なのだろうが、魔法使いの王子なんて聞いたこともない。魔法使いは森で生まれるものだ。だが、森で生まれる魔法使い以外にも魔力を持った人間は存在する。魔法使いの子孫だったり、突然変異だったり様々だ。だが、魔法使いではない以上、魔法は使えないはずだ。

「返事は？」

ラファは慌てて頭を下げた。

「ラファと申します。勝手に城内に入ったこと、まずはお詫びいたします」

「名など聞いていない。魔法使いかと聞いている」

狼が男の前に出て、こちらを見据える。

目くらましの魔法は効いているはずだ。花卉や花を降らせなくとも、リリの存在や、狼に普通に話しかけた様子から知られてしまったのだろうか。

「そうです、魔法使いです。わけあって、この城にあるという冬の秘宝を探しに参りました」

ラファは迷ったが、来訪の目的を包み隠さず伝えた。誠意を表すという気持ちもあったが、狼と男にそら恐ろしい力を感じたのだ。襲われたら自分一人の力では逃げきれない。それなら一か八か、正面からぶち当たった方がマシだと思った。

ラファが新緑の瞳でまっすぐに見据えると、男は一瞬、気圧されたような様子になった。狼がグルルッと唸って、男は気を取り直したらしい。

「そんなものは知らない。用がそれだけならさっさと立ち去れ」

「しかしこの城は強力な冬の気に包まれています。きっとこの城に冬の秘宝があるはずなのです！」

「あつたとしてもお前には関係ない！」

男は一喝した。ラファは押し黙る。

「早く出ていけ」

男が城門を指差す。狼が心得たように城門に駆けていき、その脇にある紐を口で引いた。すると門扉が勝手に上がり出した。これも魔法具なのだろう。打ち棄てられた城と聞いていたが、どうやら至るところに魔法具が存在しているようだ。

「……リリ。帰ろう」

「え？ いいの？」

「仕方ない。ここはあの人の城だ。帰れと言われたら帰るしかないよ」

いつの間にか辺り一面が白に染まっていた。さらに雪は降り続けており、もういくらかすれば帰り道はなくなっていただろう。

帰れというのは、このせいであったのかもしれない。

ラファはふと立ち止まり、振り返った。城砦は吹きすさぶ風に飛ばされる雪に隠れてもう見えない。

「美しい人だったね」

先ほどの男の姿が目には焼き付いている。影のある美丈夫とでも言えばいいだろうか。兄や父も見目がいいと思っていたが、彼と比べると色褪せて思えてしまう。

「ラファの方が綺麗だと思うけど」

胸元のリリが不愛想に答える。どうも先ほどの狼に怖い目に遭わせられたのを怒っているらしい。

「ありがとう」

精霊の感じる美しいと人間の美しいは違うはずだ。でも慰めてくれる気持ちは嬉しい。

あの美しい人は、あの城に一人なのだろうか。怪物とまで呼ばれる彼の受けた呪いとは一体何なのだろう。

気になるが、ラファは彼に拒絶された。これ以上勘ぐっても仕方ない。

「冬の秘宝は諦めるの？」

「帰ってから考えるよ。帰る頃には父さんにもばれてるだろうし」

叱られるだろうなと思うと足どりはますます重くなるが、帰らないわけにもいかないだろう。

「っ」

風が強くなってきた。まっすぐ歩くのも難しい。春の気のために寒さはそれほど感じないが、視界が効かない。

冬には雪と氷に閉ざされる山中の城砦。まるで何かを守ろうとしているかのように。

「あっ」

叫んだときには遅かった。ラファの足は地面を踏みしめることができなかった。登る途中の地面の裂け目を思い出す。きっとあそこだ。踏み外したのだ。

「リリ、出て！」

ラファは滑るようにして落ちながら咄嗟に胸元を開き、リリを掴んで放り上げた。もう魔法も間に合わない。ラファの方は奈落へと落ちて……。

落ちていくと思った瞬間、襟首を何かに掴まれ、いや、噛まれるよう引っ張り上げられる。穴から離れたところに放り上げられて、すぐに何かは離れていった。一瞬、狼の肢が見えた。

ラファの心臓は早鐘を打っている。

「無事か？」

声をかけられた。ラファはちらりと背後を見て、底の見えない穴にぞっとした。ずるっと足が滑る。ほんの僅かだったが、また落ちるのではという恐怖に囚われて、ラファは慌てて穴から遠ざかり、そのまま視界に入った腕にしがみ付こうとした。

「っ、離れろ！」

ほんの僅か触れた瞬間にラファの手が払われ、腕の主はラファから距離を取る。

腕の主は先ほどの美しい男だった。目を大きく睜り、呆然としている。

「あの、すみません。助けてくれたんですよね？ ありがとうございます」

ラファは謝罪と礼を口にしたが、男はラファの言葉を無視して自分の手を凝視している。

「何故だ、どうして……？」

尋常な様子ではない。

「ラファ。助けて！」

ラファは声をかけようとしたが、甲高い声が遮った。慌てて辺りを見回すと、リリが狼の口の中から叫んでいた。

「リリ！」

狼がぱかりと口を開けると、リリがヨタヨタと飛んでくる。ラファはリリをそっと受け取った。リリは小鳥のようにパイパイ鳴く。

「悪い、リリ。怖い目に遭わせたね」

「本当だよ。ラファの馬鹿！」

文句を言いながらもリリはラファの胸元に潜り込んで、そこで丸まってしまったようだ。プルプル震えている身体をラファは布越しにそっと撫でてやる。

「これではもう下山は無理だ」

淡々とした声がかかった。男は動揺を治め、最初に出会ったときと同じように冷たい表情をラファに向けてきた。

「春が来るまではこの雪は融けない」

登る途中の道を思い出した。山の斜面や割れ目を避けるように曲がりくねっていた道。雪が積もって隠してしまうと、正しい道に行くことは不可能だ。リリにはこの山の中ではラファを乗せて飛べるような姿にはなれない。

「そんな」

せめてリリだけ下山させたいが、小さな身体では麓の村にも辿り着けないだろう。ラファは今やっと自分の行動を後悔した。自分だけならともかく、リリまで巻き込んでしまった。

「だから早く出ていけとிட்டのに」

「ごめんなさい」

男はもしかして心配してくれていたのか。そう思って男を見ると、眉間に皺を刻まれ、顔を背けられた。

拒絶されているようだ。ラファは悲しくなったが、これからどうすべきかを考えなければならない。答えは一つだけ見付かった。

今は吹きすさぶ雪に隠れて見えないが、城までは充分歩ける距離だ。

春まで、あるいは下山の方法が見付かるまで城に滞在させて欲しい。拒絶ぶりからすると断られるかもしれないが、どんな対価を要求されても応じる覚悟だ。ラファだけではなくリリもいるのだから。

ラファは男に声をかけようとしたが、その前に男が冷たい濃青の瞳でラファを見据えてきた。

「仕方ない。城に招こう」

ラファが頼むより前に男が大きい溜息とともに提案してくれた。

「あ、ありがとうございます！ 感謝します」

冷徹なように見えたが、そうではないのかもしれない。

「俺はラファです。この子はリリ。あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

ラファの頭上で光が生まれる気配がした。真っ白い世界の中で鮮やかな青い花が、雪とともにラファの頭に降ってくる。いつの間にか目くらましの魔法が切れてしまっていたようだ。

「それは？」

男の濃青色の瞳が訝しげに細められる。

ラファはばつの悪い心地で青い花を摘みみ上げる。花の先端が開いた、ラッパのような形をした小さな野の花だ。

「何故、雪融草の花が？」

雪融草。ラファも聞いたことがある。北の地や高山で春になると真っ先に雪を割って顔を覗かせる花だ。この辺りも春になると咲くのだろうか。

「これ、俺の力なんです」

レガレノの森の村人は皆ラファのこの力を知っている。知らない人に説明するのは未熟の証拠のようで恥ずかしいのだと初めて知った。

「嬉しいことがあると勝手に降ってくるんです。気味が悪いですよ。外見だってこんな普通の男なのに」

せめて花の似合う女性ならよかったのに。ラファは髪を手でかき混ぜて雪融草と雪を振り払う。白い雪の上に雪融草が散る。

「いや、別に」

男は不愛想に応じた。

気味悪がられはしなかったようだ。

「その狼はルース。……私はウィルクだ」

「はい。ウィルク様」

名前を教えてくれた。それだけでラファはなんとなく嬉しくなる。またひらりと雪融草の花が降ってくる。

ウィルクが雪融草とよく似た色の瞳を僅かに見開く。どうしたのだろうかというラファが首を傾げると、ふいと視線を逸らされた。

「また落ちたくないなら私の後を付いてこい。ただし、私からは距離を取るんだ。ルースの後ろを歩け」

冷たい声で命じられて、ラファは頷く。

「はい、気を付けます。あの、ウィルク様」

「何だ？」

先を行きかけたウィルクが振り返って睨んでくる。ラファは怯まなかった。

「しばらくよろしく願いいたします」

笑顔で告げると、ウィルクは冷めた眼差しでラファを探るように見詰めた後、返事もせずに歩

き出した。その少し後ろをルースが付いていく。

ラファはリリを胸に抱き、ルースの足跡を追いかけるようにして城に向かって歩き始めた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>